

報告3 デンマーク

優しい時間 ヴェステボの暮らし

ヴェステボ (Vestbo) はデンマークのミゼルファート市の北東の外れにある。成人の障害者の住まいと日中の居場所だ。

私たちの目的は、権利条約 19 条＝「地域で自立して生きるための条件」を考えること。

草刈りの終わった牧草地が続く。ときどきそのゆるやかな丘に風力発電の大きな羽が回っている。

*

施設長のトーベンはこの道 25 年のベテランだ。

○ここには 22 名の障害者がそれぞれアパート (35 平方) で暮らしている。デンマークでは一人あたり 65 平米の法律があるが、共有部分もカウントされるので。”共有スペース”を大事にした。私たちのアイデアを住宅公団が設計した。

○この建物は 1936 年からここにあった。60 名の軽度の知的障害の女性たちが住んでいた。12 キロ離れた小さな町には 13 名が暮らし、スコーバック地区には 24 名が住んでいる。15 年前に統合して三つの施設を合同したのが「ヴェステボ」だ。

○平均で 47 歳の大人のための住居で、18 歳から 91 歳が住んでいる。学校での教育を受けた人はほとんどいない。いままでずっと「施設の」にやってきたが、政治家に働きかけて、「部屋」でなく、今のアパート方式に 2 年前にすることができた。一人でアパートに住むことをノーマルな暮らし方と考えている。

○職員は夜勤を含め 115 名がヴェステボの 3 つの施設全体で働いている。みな長く働いてくれている。医師、心理療法士は配属されていない。

○日中は、住んでいる人たちが釣具や樽への色づけなどの作業をしている。それでお金を得ているわけではない。



○みんなは、大人だが知的には 5、6 か月～8、9 歳だ。高齢者が残りの人生を介護されて生きるのとは違い、ここは発達に重点がある。

○みな年金で生活し、住居費、光熱費、食事代を自分で支払っている。

○ここの運営には一人あたり一日 1500～1800 クローネが必要とされる。市からは全体経費が支払われ、現場裁量で執行される。監査を含め施設長責任は重い。

市は財政縮小の方針で、2%カットが示されている。職員 2 人分のマイナスだ。困ったことだ。

○親とのつながりは 2 年前まではほとんどなかった。いまはアパート方式なので、訪れる人はだんだん増えている。

○家族会議は年 4、5 回開き、要望を聞いている。行事には家族もいっしょに参加した。近所の人たちと交流する余裕はない。

*

「障害者権利条約をデンマークはすでに批准している。19 条の地域で生きる権利を保障する、そのための条件はどんなものだと施設長は考えるか？」

○ここに住む人たちは町の中で一人で生活はできない。服を着ること、食事することもむずかしい。



スタッフがリズムをつくっている。それができないと町中で一人では暮らせない。それができる人たちは町のアパートでヘルパーを雇用して一人で暮らしている。

○ここに住む人は、町の雰囲気より自由で空間があって、自然が必要な人たちだ。そのため町の端っこにあるようになっているが、ここには広い空間がある。ヴェステボに暮らす人たちは知的に重度な人たちだ。町中にある小規模な施設（グループホーム）を希望すれば越していける。一人で町中のアパートで暮らしたい人は、デンマーク発祥の



「オーフス方式（＝パーソナル・アシスタント）」でヘルパーを雇って生活している。

社会が保障すべきは、そうした選

択にたる社会資源だ。



京都北部・与謝の海養護学校と地域をつくってきた星夫妻と最終日、夜の海の見えるレストランで話が弾んだ。

青木嗣夫校長は「学校づくりは箱作りではない、



地域づくりだ」と説いた。その「与謝の海」につながる糸賀一雄の福祉の思想。

この子らに世の光を（与える）ではなく、この子らを世の光に（そういう社会をつくろう！）。そして、それはデンマークの訪問する先々で感じるのだと言う。

なんといいばいいのだろう。生きている人間としての存在の絶対的価値。それは障害があっても、なくても同等だ。その存在の価値に共感し、尊敬し、徹底的に守る。

一人一人の人生を大切に、一人一人がお互いの人生を認め合う。そしてみんなが、輝く今日を感じ、また来る明日に希望を託す。「生きててよかった」となれども感じられる。

ヴェステボの施設長・トーベン「共同の希望」と言っていた。（藪部英夫）



▲ヴェステボにて